

畠地帯総合土地改良事業伊那西部地区

# 舟窪西遺跡

— 埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 —

1996. 3

上伊那地方事務所  
伊那市教育委員会

畠地帶総合土地改良事業伊那西部地区

# 舟窪西遺跡

— 埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 —

1996. 3

上伊那地方事務所  
伊那市教育委員会

## 序

伊那市教育委員会は永年にわたって伊那市内の数多くの遺跡発掘調査を実施し、市内の歴史の解明に寄与してまいりました。舟窪西遺跡は平成7年度畠地帯総合土地改良事業（伊那西部地区）実施地区に該当するとのことで緊急発掘調査を行いました。

本遺跡は平成4年度の分布調査によって新たに発見され、この時点で文化庁に「舟窪西遺跡」として遺跡発見届を提出しました。このような経緯があつたために、発掘調査に着手する以前から調査をすればかなりの成果が収められるのではないかとの期待が持たれていた。ところが、実際に発掘調査をしたところ太平洋戦争時の竪穴4基、近代の溝状遺構1基と、当初期待していた程の成果はなかつた。この理由は限定された面積の調査だったためであろう。

近年、埋蔵文化財の有り方が大きく変わり、いくら新しくても考古学的調査によって発見された遺構・遺物は埋蔵文化財の範疇であると提唱されている。従つて、今回検出された四つの遺構も当然ながら、遺跡の一角に位置づけられても当然であろう。

今度、舟窪西遺跡発掘調査では多くの方々の深い御理解、御協力をいただき、無事に調査が完遂できましたことに対し、心より深い感謝を申し上げるとともに、ここに報告書の刊行を祝うものであります。

最後に、この報告書が、今後教育向上に資することを願つて序といたします。

平成8年3月1日

伊那市教育委員会

教育長 保科恭治

## 例　　言

1. 本書は、平成7年度に実施された畑地帯総合土地改良事業伊那西部地区に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書である。
2. この緊急発掘調査は、上伊那地方事務所の委託により、伊那市教育委員会が遺跡発掘調査団を編成し、発掘調査団に事業を委託して実施した。
3. 本調査は、平成7年度中に業務を終了する義務があるため、報告書は図版を主体とし、文章記述もできるだけ簡略にし、資料の再検討は後日の機会にゆすることにした。
4. 本文執筆者は、次のとおりである。担当した項目の末尾に氏名を記した。

友野良一　　飯塚政美

◎図版作成者

・遺構及び地形実測図

友野良一　　飯塚政美

◎写真撮影者

・発掘及び遺構　　友野良一　　飯塚政美

5. 本報告書の編集は主として伊那市教育委員会がおこなった。

6. 遺構図及び実測図面類は伊那市考古資料館に保管してある。

## 目 次

序  
例 言  
目 次  
挿図目次  
図版目次

第Ⅰ章 発掘調査の経過.....	1
第1節 発掘調査に至るまでの経緯.....	1
第2節 調査の組織.....	2
第3節 発掘調査日誌.....	2
第Ⅱ章 遺跡の環境.....	4
第1節 遺跡の位置.....	4
第2節 地形及び地質.....	5
第3節 歴史的環境.....	10
第Ⅲ章 造構と遺物.....	12
第1節 調査の概要.....	12
第2節 造構と遺物.....	12
(1) 竪 穴.....	12
(2) 溝状造構.....	18
第Ⅳ章 所 見.....	18

## 擇 図 目 次

第1図 舟窪西遺跡の位置図	4
第2図 小黒川扇状地の全体図と船窪の位置	6
第3図 舟窪地域の地形面区分と船窪断層	7
第4図 小黒川扇状地を構成する地質の柱状図	8
第5図 舟窪断層と断層による変動地形	9
第6図 小黒原台地周辺遺跡分布図	10
第7図 地形及び遺構配置図	13
第8図 第1号竪穴・第2号竪穴・第3号竪穴・第4号竪穴実測図	15
第9図 溝状遺構実測図	17

## 圖 版 目 次

図版1 遺跡遠景
図版2 遺 構
図版3 遺 構
図版4 遺構及びトレンチ掘り下げ状況

# 第Ⅰ章 発掘調査の経過

## 第1節 発掘調査に至るまでの経緯

今回発掘調査の対象となった舟窪西遺跡は平成5年3月市内遺跡詳細分布調査事業を導入したことにより新たに発見された遺跡であり、この調査報告書は平成6年3月刊行されている成果については後述する。この遺跡は畑地帯総合土地改良事業伊那西部地区内に含まれており事業設計段階で発掘調査の必要性が明示されていた。調査実施に至るまでには各種の保護協議事務手続が行われ、それらを流れに沿って記し、今回の事務手続に利便をはかった。

平成6年10月4日、伊那市役所会議室で、長野県教育委員会文化課指導主事、上伊那地方事務所土地改良課職員、伊那市教育委員会社会教育課職員三者で平成7年度分埋蔵文化財保護協議を綿密に実施し、本来の事業進捗に支障のないように万全を期した。

平成7年9月29日付けて、上伊那地方事務所長より畑地帯総合土地改良事業伊那西部地区における舟窪西遺跡発掘調査計画書、発掘調査経費見積書についての提出依頼がある。

平成7年9月29日付けて、文化庁長官宛に埋蔵文化財発掘の通知について（第57条の3第1項の規定による）を提出する。

平成7年10月3日付けて、文化庁長官宛に埋蔵文化財発掘調査の通知について（第98条の2第1項の規定による）を提出する。

平成7年10月4日付けて、伊那市長から上伊那地方事務所長へ舟窪西遺跡発掘調査実施計画書及び発掘調査見積書を提出する。

平成7年10月20日付けて、畑地帯総合土地改良事業伊那西部地区埋蔵文化財包蔵地発掘調査（舟窪西遺跡）委託契約書を上伊那地方事務所長三浦太家男、伊那市長唐澤茂人両者間で締結する。

平成7年10月26日付けて、伊那市長唐澤茂人と市内遺跡発掘調査団長友野良一両者で埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書を取り交す。

平成7年11月27日、舟窪西遺跡発掘調査終了届を長野県教育委員会教育長宛て提出する。

平成7年12月22日付けて発掘調査見積書（変更）を上伊那地方事務所長三浦太家男に提出する。当初経費200万円が70万円に減額されることになった。

平成8年1月8日付けて埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書（変更）を伊那市長職務代理者と上伊那地方事務所長とで締結を完了する。

平成8年1月22日付けて変更委託契約書を伊那市長職務代理者と発掘調査団長とで結ぶ。その後、社会教育課では減額補正を組み、対応処理を実施した。

してきた。

平成7年11月22日 晴 構造遺構、第1号竪穴、第2号竪穴、第3号竪穴、第4号竪穴の完掘を済ませ、清掃を終え、ただちに写真撮影を完了する。同遺構の東、西壁のセクション図を作成する。第1号竪穴、第2号竪穴、第3号竪穴、第4号竪穴の平面、断面実測図を終了する。構造遺構の平面、断面図を作成し、現場での発掘調査は全て完了の運びとなった。午後より発掘道具、発掘器材類の水洗いを行い、きちんと整頓するように束ねる。

平成7年11月23日 曇 トラックにてこれらを伊那市考古学資料館へ運搬する。午後2時頃から重機にて埋め直しをして原形復旧の姿にもどした。

平成7年12月～平成8年2月 地面の整理、原稿執筆、報告書の編集報告書を印刷所へ入れ、印刷を開始し、校正を行う。

平成8年3月 報告書を刊行し、本事業の完了をみた。(飯塚政美)



発掘風景（その1）



発掘風景（その2）

## 第II章 遺跡の環境

### 第1節 遺跡の位置

今回、発掘調査を実施した地区は平成5年3月分布調査を行い、遺跡地の存在を確認し、遺跡発見届を提出して舟塙西遺跡と命名した地点である。本遺跡地は、長野県伊那市大字伊那上  
すみヶ丘区船塙地籍の南西部に位置している。遺跡地までの経路はJR飯田線伊那市駅で降車して、駅前へ通じている道路を西へ200m位行った四角(近くに大芦郵便局がある)を左折して、県道西駒ヶ岳線を南へ150m程行くと三叉路に出会い、この場所を右折して坂道を西へ向う。登



第1図 舟塙西遺跡の位置図 (1:50,000)

り始めて最初に、左手に天台宗円福寺、次に右手に荒井神社が荘厳な漂ずまいをかもし出して鎮座している。

荒井神社前の三叉路を左手に進んでいくと、伊那健康センターの白い建物が目に映える。さらに登り坂を西進すると、左手に長野県伊那弥生ヶ丘高等学校、右手に伊那市立伊那中学校の校舎が整然と建てられ、静寂の感に満ち、大学園地帯を形成している。伊那中学校の南側がY字路になっており、左折して、直ちに左手に長野県伊那文化会館が、右手に長野県伊那勤労者福祉センターがある。この二つの大きな県施設を取り巻いて駐車場、運動場、テニスコート、陸上競技場が展開し、今日、呼ばれている生涯学習の伊那市を代表する一大拠点となっている。勤労者福祉センターの西側に婦人の家が建てられている。この施設も生涯学習の一環として常に有効利用され、婦人の集い、活動の中軸を担っている。

この建物付近の交差点を左折すると、T字路になる。この位置から西方へ300m位行くと、Y字路につきあたり、右手に道を取れば、中央自動車道路を越え、大型農道を横切り、ただちにY字路を右折し、さらに西方に向かって進む。途中、ますみヶ丘集落の中心地を通り過ぎて200m程行くと交差点があり、これを左折して奥まった畠地帯が今回の調査対象地である。

船窪集落は明治時代初期、下新田の人々の一部が入植して、現在の礎を築いた。従って集落としては新しい。

(飯塚政美)

## 第2節 地形及び地質

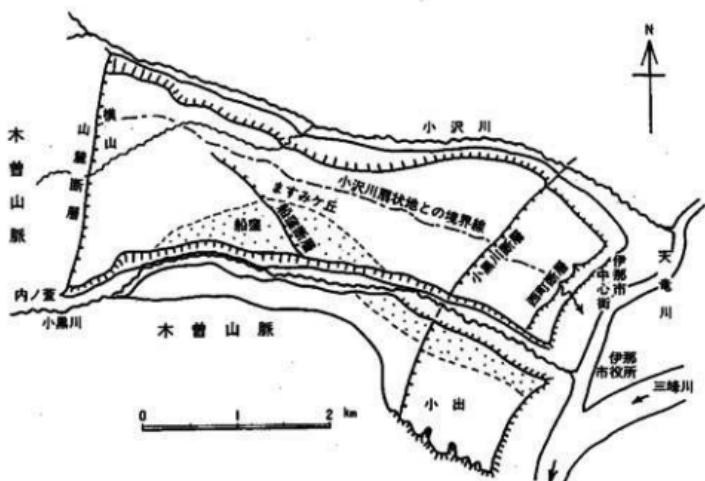
### 平地林が広範囲に残っている船窪地域

舟窪西遺跡は小黒川扇状地の中央部付近に位置し、伊那市街地から西方へ4.5km程に当たっている。本地域の南縁に小黒川が、北縁に小沢川がそれぞれ木曾山脈に源を発し、天竜川に向かって直線状に東流している。この両河川は所謂田切地形の形態を有し、ゆるやかな起伏を残す台地状地形を成している。扇状地の西側は木曾山脈に、東側は天竜川に沿った低地帯に切られ西縁の山麓線上に横山集落が古くから開け、東縁の天竜川面には伊那市街地が広がっている。

船窪地域の広大な扇状地上はテフラ層や黒土層によって厚く覆われており、土壤的要件は悪く、開発の手はあまり入っておらず、自然的景観が保持されている。土地利用は水便が悪いため、畠地や牧草地が多く、第二次世界大戦中の開拓地が多い。

この地域は山麓にかけては平地林が比較的、広範囲で残存しており、伊那市では単に開発という名目の基に伐採するのは忍びがたい面がある。従って平地林保護問題は真剣に取り組み、永久に保存していく方策を望むところである。

遺跡地の東側は若干凹地に、北側は小さな沢が入り込み、微地形的に変化に富んでいる。このようなために、かつては小さな湧水地帯があったと思われ、この水を利用して古代人は生活をしていたのであろう。



第2図 小黒川扇状地の全体図と船塗の位置

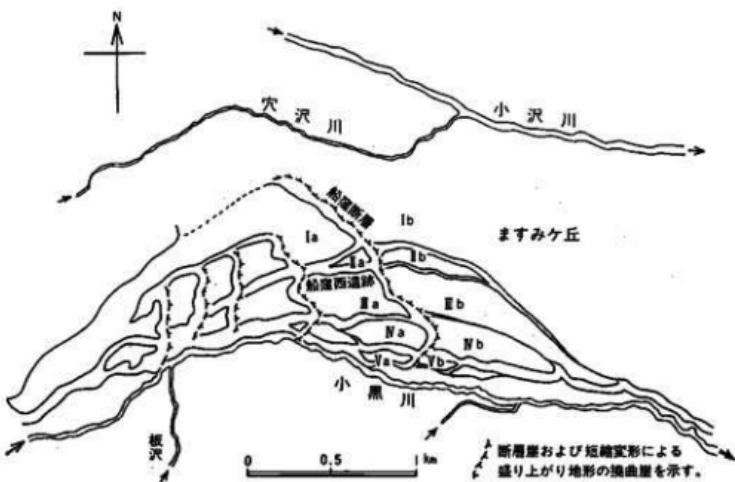
#### 船塗地域の地形

船塗地域の北側に伊那市立伊那西小学校のコンクリート造りの校舎がひとり立ち、周辺はますみヶ丘と呼ばれ、酪農を中心となっている集落である。ますみヶ丘の名称にびたりと一致するように西から東へのびているゆるやかな高まりを持ち、開拓地以外は林相が広がっている。

船塗の集落は丘を中心にして南側に開けた船形状の窪地にあり、この名称は地形からその由来があると思われる。このような地形が形成される成因は小黒川扇状地を小黒川が開析していく過程でつくりあげた段丘状の地形であるといわれ、これは学名扇状地開析段丘と呼ばれている。

船塗地籍付近の地形をこと細かに観察してみると、何段かの浸食面に分類可能である。ますみヶ丘に接した方が高い侵食面で、小黒川に向かって順次低くなり、これらは4段に大別できる。さらに、船塗集落の中央部を横切って北西—南東方向に通っている船塗断層があり、これは一見すると小高い丘陵状になっている。船塗断層については後で述べることにする。

断層によって4段の地形面がすべて切られている。断層は西上がり、東落ちのため、西側にある舟塗西遺跡は一段と高くなっている事実が分かる。従って、舟塗西遺跡は第3図に照合してみると、III a面にあたる。



第3図 船窓地域の地形面区分と船窓断層

#### 船窓地域の地質

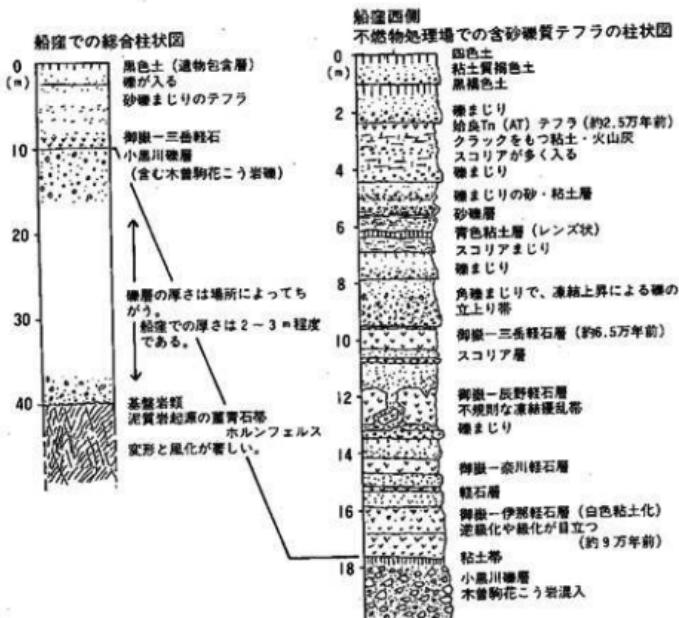
この項及び以後は平成5年に分布調査を実施した時の報告書による。

本地籍は領家帯の変成岩である墨青石帶ホルンフェルスを基盤岩とし、その上に、小黒川層状地疊層がのっている。この疊層は木曾山脈側から小黒川によって運び出されてきて堆積した砂疊層である。さらに、最上部には層状地疊層を覆うテフラと黒色土層がのってくる(第4図)。

基盤岩は小黒川に面する侵食崖にあらわれている。とくに、小黒川右岸の小屋敷に面した崖下で模式的に観察できる。主として泥質岩起源のホルンフェルスである。ここの露頭では権兵衛峠からのびてきている境崎断層(神谷断層ともいう)の断層破裂帯があらわれており、著しく変形している。さらに注目したいのは船窓断層の断層崖下にも変形の著しい基盤岩が顔を出している。このことについては断層の項で述べる。

小黒川疊層は最厚30mの地層で、小黒川および城南町の崖で観察される。ホルンフェルスと木曾駒ヶ岳岩を疊層として、最大疊は数10cmのものをわずかに含むが圧倒的に多いのは20cm以下の疊であり、亜円疊から亜角疊である。上方は細粒化を示し、最上位の部分で風送氷成型のテフラ層と互層している。テフラ層を疊層中にはさむことから、小黒川疊層の主体は10万年前ないしそれ以前の最終氷期を通じて堆積した地層である。

最下部のテフラ層は御嶽-伊那軽石層より上部のものからなる。テフラ層は横山から鳩吹方面の山麓部に向かって厚くなっている。これは、テフラ層と砂疊層とが交互にくりかえして堆積しているためである。伊那市不燃物埋立地においては御嶽-伊那軽石層が2mの厚さとなり、



第4図 小黒川崩壊地を構成する地質の柱状図

伊那谷では最大の層厚を示す。テフラ層の最上部の褐色土中には広域テフラの姶良Tnテフラ(AT)が1~2cmの厚さではさまれており、その上には黒色土(黒ボク土)が2m余の厚さでかぶっている。

舟窓西遺跡では、これらのうち最上部の黒色土で占められている。黒色土の下側は礁まじりである。さらにその下側に礁まじりのテフラ層があらわれ、最下部は御嶽一三岳軽石層となる。テフラ層の層厚は約8mである。

#### 注目すべき船窓断層

船窓の中央部を横切るこの断層は船窓の五社神社東側から大坊方面に向かってのびており、断層崖線の直下を平行して農道が通っているので観察が容易である(第5図)。しかし、街上断層として地形を複雑に変形させているため、全体像を理解するには困難である。

舟窓西遺跡の台地直下の断層崖下には基盤岩が露出していて大変重要である岩石は領家帶のホルンフェルスであり、著しい破碎変形を受けている。この変形は船窓断層による変形というより、当地域を通過している大規模断層である境岬断層の活動によるものであろう。

船窪断層は当地域の侵食面形成後に山地～盆地間の境界域に集中した短縮変形を受け、山地側が盆地側へ衝上したために生じた断層である。船窪断層の背面（山側）の地形に4段の盛り上がり地形が発達している。このような変動地形は短縮変形の結果として生じた波曲変形である。執筆は松島信幸、寺平宏両名による



第5図 船窪断層と断層による変動地形



船窪断層遠景

### 第3節 歴史的環境

小沢川と小黒川に挟まれて広々と広がった台地は通称小黒原と呼ばれ、市民が親しみを抱いている。この広大な範囲内に現在、確認されている遺跡は27カ所に達している。これらの分布状態は第6図を概観すれば一目瞭然であり、三つのパターンにグルーピングが可能である。そのうちの一つは山麓扇状地の扇頂部や扇側部に展開する遺跡群、もう一つは扇状地の扇端部と河岸段丘面上にある遺跡群、さらにもう一つは小黒川や小沢川河岸段丘に沿って東長に細長く点在する遺跡群である。

これらの分布形態は地理学者ブラッシュが提唱した「水のない所には居住できない」との説をまさしく実証している実例である。27カ所の遺跡内訳は次の通りである。旧石器2、縄文早期2、縄文前期7、縄文中期2、縄文後期4、縄文晚期2、弥生前期1、弥生中期1、弥生後期3、古墳3、奈良・平安時代の土師器を出土したもの10、奈良・平安時代の須恵器を出土したもの12、灰釉陶器を出土したもの12、中世陶磁器を出土したもの6、近世陶磁器を出土した



第6図 小黒原台地周辺遺跡分布図 (1 : 50,000)

- 1舟塗西 2北方 3矢塚畠 4間畑 5八人家 6おぐし沢 7丸山清水 8穴沢  
9ますみヶ丘 10舟塗 11上ノ山 12ねずみ平2 13ねずみ平1 14上手原 15城畠  
16小沢原 17赤坂 18ますみが丘 19城楽 20伊勢並 21八人家古墳 22狐塚南古墳跡  
23狐塚北古墳 24山の神 25富士塚 26小黒南原 27ウグイス原団地

もの5である。

現在まで動機は様々であるが、…応、発掘調査を実施した遺跡と、そこから検出された遺構・遺物を記す。遺物に関しては縦年に基づく記載方法を採用する。

5の八人塚遺跡（縄文中期初頭竪穴住居址4軒 縄文中期後葉竪穴住居址3軒 縄文中期土壙7基 土器編年では梨久保式 平出3A式 藤内式 井戸尻式）。6のおぐし沢遺跡（平安時代竪穴住居址1軒 土器編年では茅山上層式 藤内式 井戸尻式 曾利式 土師器 灰釉陶器 内耳土器）。

7の丸山清水遺跡（縄文中期初頭竪穴住居址2軒 縄文中期中葉竪穴住居址1軒 縄文中期後葉竪穴住居址17軒 縄文中期土壙17基 平安時代竪穴住居址3軒 土器編年では梨久保式 平出3A式 藤内式 井戸尻式 曾利式 土師器 須恵器 灰釉陶器）。10の舟窪遺跡（近世末期溝状遺構 梨久保式 井戸尻式 曾利式 称各寺式 近世磁器）。1の船窪西遺跡は平成5年3月実施された分布調査によって新たに発見された遺跡である。分布調査によれば平安時代竪穴式住居址2軒 梨久保式 井戸尻式 曾利式 灰釉陶器 緑釉陶器の検出を見た。特殊な遺物として弥生後期の磨製石鎌が1点併出している。

15の城畠遺跡（遺構の検出は無し、土器編年では諸磯b式 大歳山式 十三菩提式 船元式 梨久保式 下小野式 井戸尻式 曾利式 壇ノ内式）。16の小沢原遺跡（弥生前期土壙3基 中世末期頃の炉址・井戸址 土器編年として大歳山式 十三菩提式 北白川下層III C式 曾利式 大洞A式 水神平式 中世陶器として古瀬戸天目茶碗 古瀬戸灰釉碗 近世陶磁器として有田焼藍色染付茶碗 濱戸鉄釉摺鉢）。

17の赤坂遺跡（縄文中期土壙1基 時期不詳土壙3基 土器編年として木島式 梨久保式）

18のますみが丘遺跡（時期不詳溝状址1基）。19の城來遺跡（縄文前期末葉土壙1基 縄文後期土壙1基 時期不詳土壙2基 時期不詳マウンド1基 近世原田旧井址の一部分 時期不詳の溝状址3基 太平洋戦争時の竪穴3基 土器編年として縄文早期楕円押型文 下島式）。20の伊勢並遺跡は過去3回にわたって発掘調査を実施している。第一次調査は昭和38年、第二次調査は平成3年、第3次調査は平成6年であった。調査の結果、縄文中期住居址、縄文早期土器片 21の八人塚古墳は昭和16年塩原伝氏によって調査され、その時の状態は次のようにあった。長さ6m、幅1.2m、和鏡1を出土している。22の狐塚南古墳は横穴式石室を有する円墳で、土師器、須恵器、金環、銀環、刀子、馬具等が出土した。なかでも杏葉3枚は銅製下地に金張りをした優品で、朝鮮からの渡来品であり、現在、伊那市有形文化財考古資料に指定されている。11の上ノ山遺跡は過去3回にわたって発掘調査を実施し、平安時代の竪穴住居址6軒、江戸時代の柱穴群2棟、太平洋戦争時の防空壕2基の検出を見ている。（友野良一・飯塚政美）

## 第Ⅲ章 遺構と遺物

### 第1節 調査の概要

舟窪西遺跡は前述したような動機にて、新たに発見され、船窪集落内の南西側に位置しているので、この名が命名された。この船窪地籍内には集落の東側に舟窪遺跡があり、過去に発掘調査が実施され、その実態がわかってきてている。今回の発掘調査の直接的な原因は表紙のサブタイトルに懸けてあるように畠地帯総合土地改良事業（伊那西部地区）実施に伴う調査であり、調査範囲は現道を利用した道路幅5.5mと限定されており、仮りに、遺構が検出されてもその全貌の調査是不可能に近いと懸念していた。

本調査の対象とした地区は前回の分布調査で平安時代の堅穴住居址が2軒発見された地点から東側へ100m程いった南北に通っている現道の両側であった。路肩及び道路直下には道路開設時に埋めた細縄が数ヶれしており、手作業による掘り下げは当初から無理と考え、バックフォーにて掘り下げていった。調査の結果—太平洋戦争時に構築されたと想定される堅穴4基、溝状遺構1基が検出されたが、遺物に関しては全く何も出土しなかった。

### 第2節 遺構と遺物

#### （1）堅穴

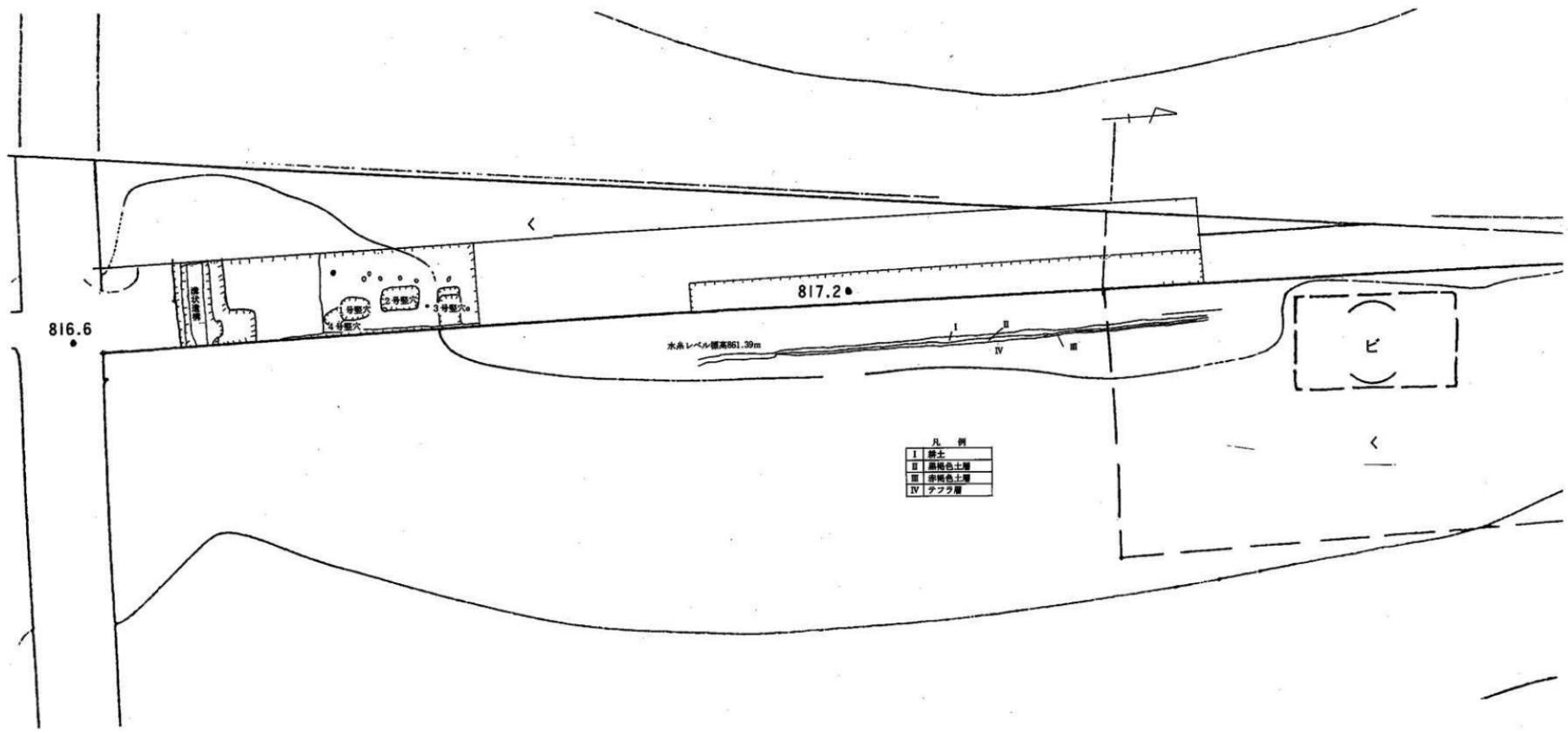
今回の調査で堅穴は4基検出されたが、もう少し、広範囲の調査を実施すれば、その数は増加すると思われる。

##### 第1号堅穴（第8図 図版2）

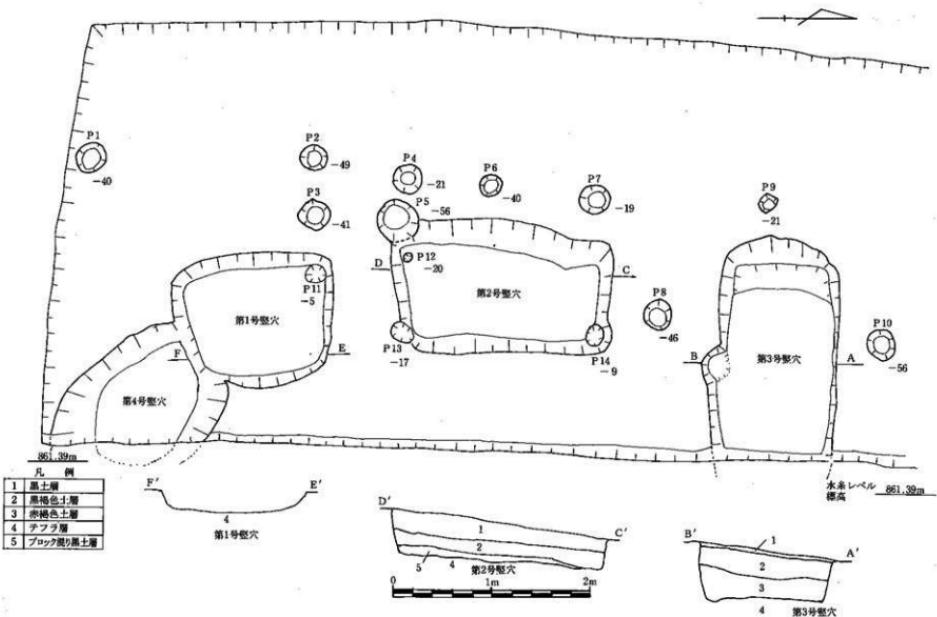
表土面から40cm位下ったソフトテフラ層面を掘り込んで構築してあり、南東部一隅で第4号堅穴を切っている。平面プランは隅丸長方形を呈し、規模は長、短軸がそれぞれ160×140cm位、深さ30cm位を計る。壁面の全般的な状態は上部は垂直気味で、中・下部にかけてはややふくらみを有している。床面はハードテフラ層面につくられ、若干の凹凸は認めるが、極めて良好であった。覆土は黒色土が充満しており、この中に相当量の木炭が検出されたが、遺物の出土は全く無かった。時期決定については第IV章の所見を参照してください。

##### 第2号堅穴（第8図 図版2～3）

南側は第1号堅穴、北側は第3号堅穴にちょうどさまれた位置に検出された堅穴であり、掘り込み面まで表土面から40cm位であった。平面プランは西側が若干張り出しているが、全般的に隅丸長方形を呈し、規模は長・短軸がそれぞれ220cm×140cm位、深さ45cm位を計る。覆土は床面近くにブロック混りの黒土層が混入しており、また、この層中から板状木炭が多量に検出され、床面上で木材を直接、焼いたような状況下であった。



第7図 地形及び造構位置図 (1 : 200)



第8図 第1号竖穴・第2号竖穴・第3号竖穴・第4号竖穴実測図

西壁は中段を有し、その他三壁はほぼ直立し、床面は凹凸が顕著であったが、固いタタキとなっていた。竪穴の三つの隅に柱穴が存在し、明らかに屋根を架けた造構と判別できた。さらに、西壁近く、南北に柱穴が存在しているが、柱を建て、西風除けの塀をつくったのであろうか。遺物の出土は全く無く、従って時期決定については第IV章を参照してください。

### 第3号竪穴（第8図 図版2～3）

南側で第2号竪穴と近接して発見されたが、東側は用地外のため調査はできなかった。平面プランはところどころで若干のデコボコはあるが、全般的に隅丸長方形を呈し、規模は長軸（東側が調査不可能なため不明）、短軸は1m30cm位、深さ50cm位を計る。表土面から30cm位下ったテフラ層を掘り込み、覆土は黒褐色土、赤褐色土が密の状態で堆積していた。西壁は中段を有し、南壁、北壁は外傾気味の状態と成っており、その組成土は上部はソフトテフラ層、下部はハードテフラ層であった。

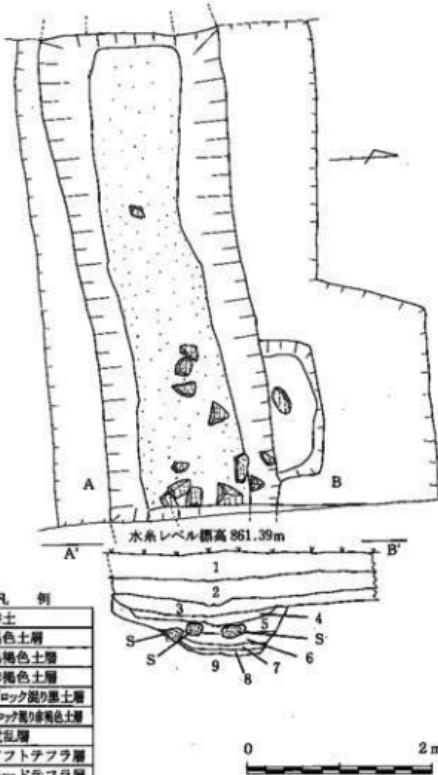
床面はハードテフラ層中につけられ、ところどころにブロック的な凹凸を認めた。プランを取り巻くようにして柱穴が穿けられており、上屋的施設があつたことは間違いない。

遺物の出土は全くなく、従って、時期決定は第IV章を読んでみて下さい。

### 第4号竪穴（第8図 図版2）

本竪穴は北西隅で第1号竪穴に切られ、また、東側は用地外のため、調査不可能との二つの条件が重なって、その全貌は見とけられなかつた。検出された部分より想定して平面プランは長円形を呈すると思われる。

規模は長軸直径は不明、短軸直径は1m35cm位を、壁高は30cm～40cm位を計り出す。壁面は大般垂直。床面は大般平坦で、固かつた。覆土中より多量の炭化物の出土がみられたが、遺物



第9図 溝状造構実測図

の出土は全く無く、従って時期決定については第Ⅳ章を見て下さい。

## (2) 溝状遺構 (第9図 図版4)

発掘調査地区内の最南端部に検出された遺構で、表土面より40cm位下ったソフトテフラ層を掘り込んで構築してある。上面幅1m70cm~1m95cm位、下面幅80cm~1m10cm位、深さ60cm位を計る。延長は西側と東側が用地外の為に、発掘調査は不可能であった。覆土は何層にもわたりており、堆積状況が明瞭に分かった。

壁面の凹凸は極めて顕著であり、南壁は外傾が強く、北壁は割合になだらかで若干の中段を有し、それらの組成土は両壁とも上部はソフトテフラ、中・下部はハードテフラであった。底面はハードテフラ層中に構築されており、水が流れたとみて、小さな凹凸が筋状に各所に混入し、この凹みに砂粒や細礫がはまり込んでいた。壁面や底面には掘れないように、石を貼り付けた箇所が部分的に見うけられ、かつての土木工事の意図がうかがえる。

拳大から人頭大程の礫で、中層部には角礫状の山石が多く、下層部には粘板岩や花崗岩の円礫が多かった。遺物の出土は全くないが、底面のレベルからみて、井筋に使用されたのである。(飯塚政美)

## 第Ⅳ章 所 見

今回の発掘調査を実施してみて知り得た問題点の2、3を述べていく。調査を実施した地区は船窪断層と命名された活断層が南北に走向している地域に該当している。従って、地質は領家帶青石帯のホルンフェルスを基盤岩としてその上に小黒川層状地疊層とテフラ層は御岳軽石層より上部の褐色土中に始良(A.T.)のテフラが広域的に覆っている。

現在の船窪集落開拓の初源は明治2年、15戸から始まっている。前回の分布調査によって、縄文中期後葉(今から4000年位前)の土器や、平安時代竪穴住居址2軒が検出されており、船窪集落が開けるずっと以前から人間の営みがあったことがわかった。

遺構はテフラ上層面を掘り込んだ竪穴4基と溝状遺構1基が検出された。竪穴の平面プランは3基が隅丸長方形、1基が長円形であり、竪穴の隅及び周間にピットの存在が見られ、明らかに上屋的施設を伴っていたと想定できる。遺物の出土は全くなかったが、覆土中より出土した炭化物の状態及び船窪集落の開拓史、過去の発掘調査実例よりみて、太平洋戦争時に農耕隊が入植し、開拓するときに使用した共同炊事場の跡と思われる。平成7年度は太平洋戦争終結50周年とのことで多くのイベントが挙行されたが、このような遺構の存在があったことも忘れてはならない。溝状遺構は船窪集落の最初の入植時に上流から引いてきた井筋と思われ、農業用水と一緒に生活用水にも利用されたのであろう。今回の調査でいろいろ御協力して頂いた各位に対し心より厚く御礼申し上げる次第であります。(飯塚政美)

図版1 遺跡遠景



遺跡地を東側より眺む（上）

遺跡地を西側より眺む（下）



第1号～第4号竪穴配置状況（上）

第1号竪穴・第4号竪穴（下）



第2号竪穴（上）

第3号竪穴（下）

図版4 遺構及びトレンチ掘り下げ状況



溝状遺構（上）

トレンチ掘り下げ状況（下） { 左 遺構掘り下げ前



右 遺構掘り下げ後

# 報告書抄録

ふりがな	ふなくばにしいせき						
書名	舟窪西遺跡						
副書名	畠地帯総合土地改良事業伊那西部地区						
卷次							
シリーズ名	埋蔵文化財緊急発掘調査報告書						
シリーズ番号							
編著者名	友野良一・飯塚政美						
編集機関	伊那市教育委員会						
所在地	〒396 長野県伊那市大字伊那部3050 TEL0265-78-4111						
発行年月日	西暦1996年3月8日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経 ***	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
ふなくばにし 舟窪西	いなし 伊那市ますみヶ丘区 ふなくば 船窪	おかげ 295			平成7年 11月13日～ 平成7年 11月22日	200	畠地帯総 合土地改 良事業 (伊那西 部地区)
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
舟窪西	集落址	绳文 平安 中世 近世 近代 現代	太平洋戦争時の竪穴 4基 近代溝状造構1基	なし	竪穴4基は農耕隊の 共同炊事場と思われ る		

---

## 舟窪西遺跡

—埋蔵文化財緊急発掘調査報告書—

平成8年3月8日 印刷

平成8年3月8日 発行

発行所 上伊那地方事務所  
伊那市教育委員会

印刷 小松総合印刷所

---

